

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督・脚本：フレッド・カヴァイエ
出演：ヴァンサン・ランドン / ダイ
アン・クルーガー / ランス
ロ・ロッシュ / オリヴィエ・
マルシャル / アムール・グライ
ア / リリアン・ロヴェール /
オリヴィエ・ペリエ

すべて彼女のために

2008年・フランス映画
配給 / プロドメディア・スタジオ
96分

2009 (平成 21) 年 12 月 25 日鑑賞

角川映画試写室

👁️👁️ みどころ

まずは、冒頭の10分間に注目！ここに論点のすべてが集約！幸せな夫婦生活から一転、妻は殺人罪で刑務所へ。こりゃきつと冤罪。そこで、テーマが「脱獄」になるところがすごい。

緊迫感いっぱい、そして人間味タップリ。96分に集約されたスリルとサスペンスに富む「脱獄」物語には、長編デビュー作となったフレッド・カヴァイエ監督の才能が随所にキラキラと。脱獄は「すべて彼女のために」。そんな邦題の意味をしっかりとみしめるべきは当然だが、さてあなたなら・・・？

まずは、美人女優ダイアン・クルーガーに注目！

本作の試写案内をみて私が最初に注目したのは、クエンティン・タランティーノ監督の最新作『イングロリアス・バスターズ』(09年)で味のある演技をみせていたダイアン・クルーガー。私がドイツ出身の美人女優ダイアン・クルーガーにはじめに注目したのは『トロイ』(04年)だが、そこでは「ハリウッドの有名女優たちがこぞって志願する中で、この映画『トロイ』のヘレン役を射止めたのは、ドイツ出身のダイアン・クルーガー。1976年生まれだから28歳。女性としてもっともいい時期(?)か・・・？そして、たしかに美しい。しかしこの映画では、女優陣はいわば『刺身のツマ』で、そのウエイトは非常に小さいもの。だから、十分その美しさを楽しむことができないのは残念。」と書いた(『シネマルーム4』63頁参照)。

しかしその後、彼女は私が観た作品だけでも『敬愛なるベートーヴェン』(06年)(『シネマルーム12』277頁参照)、『マンデラの名もなき看守』(07年)(『シネマール

ム20』146頁参照) 『ナショナル・トレジャー リンカーン暗殺者の日記』(07年)(『シネマルーム18』31頁参照)や最新作『イングリシアス・バスターズ』に出演し、その美貌を欲しいままにしてきた。

本作のタイトルにおける「彼女」とはもちろんこのダイアン・クルーガー扮するリザのことだが、緊迫感溢れる冒頭約10分が経過した後、ストーリー展開をリードするのはリザではなくリザの夫のジュリアン(ヴァンサン・ランドン)。愛するリザを警察に奪われたジュリアンは、リザのために一体何をやるの?それがこの映画のテーマだから、中盤はほとんどジュリアンのアクションに注目だが、それでもリザの存在感と美貌はバッチリ。ジュリアンと共に毎回刑務所に面会に来る息子のオスカル(ランスロ・ロッシュ)にさえ冷たくあしらわれる中、徐々に生きる希望を失っていくリザ。そして、ラスト20分にみるあっと驚くサスペンスにおけるダイアン・クルーガー演ずるリザの演技力に注目!

最近のフランス映画は面白い!それはなぜ?

私は最近の若者向け邦画を全然観る気がなくなっているが、その反面最近のフランス映画は面白い!たとえば『ジャック・メスリーヌ Part1 ノワール編』『ジャック・メスリーヌ Part2 ルージュ編』(08年)、『ぼくの大切なともだち』(06年)(『シネマルーム20』296頁参照)、『裏切りの間で眠れ』(06年)(『シネマルーム19』195頁参照)、『マルセイユの決着(おとしまえ)』(07年)、『いのちの戦場 アルジェリア1959』(07年)(『シネマルーム22』128頁参照)などだ。

そんな面白いフランス映画を観て私がいつも感心するのは、それらはほぼ90~120分で1本の映画を完成させていること。テレビドラマの延長のような最近の邦画はやたらセリフが多いうえダラダラとした状況説明が続くが、フランス映画の名作は基本的にセリフが少なく俳優の表情一発で勝負するものが多い。また、状況説明を極力排除し、観客自身の目と耳と感覚で状況を理解させようとする意図が明確だから、必然的に上映時間は短くなる。さらに、カメラアングルもテレビドラマのような一定の距離感ではなく、極端なアップを多用することが多い。その点は、私が『アフター・ウェディング』(06年)(『シネマルーム16』63頁参照)や『ある愛の風景』(04年)(『シネマルーム16』70頁参照)、『悲しみが乾くまで』(08年)(『シネマルーム19』245頁参照)で注目した、スウェーデンの女性監督スサンネ・ピアも同じだ。最近のフランス映画が面白いのは、そんなところに原因が?

フレッド・カヴァイエ監督の才能に注目!

本作が長編デビュー作となったフレッド・カヴァイエ監督はいきなり各メディアから賞賛を浴び、セザール賞にノミネートされたとのことだ。そのカメラアングルの特異さは、本作の冒頭約10分間のジュリアンとリザとの濃密な(?)夫婦関係をみればよくわかる。

日本人夫婦なら、いくら仲良しでも最初の子供が生まれたら多少セックスライフから遠のくものだが、ジュリアンとリザの場合はまるでお構いなしだ。

まずは最初に緊迫感いっぱいのおうめき声をバックとした男同士の闘い(?)におけるジュリアンの表情に驚き、続いてジュリアンとリザの濃厚なセックスシーン(?)に驚いた後、今度はいきなり警察が幸せいっぱいのジュリアンとリザ夫婦の家にリザの逮捕のため乗り込んでくるから、最初の約10分間で3度ビックリ!

映画って、たった10分間でここまで観客の目を引きつけることができるわけだ。本作が長編デビュー作とは到底思えない、フレッド・カヴァイエ監督の才能に注目。



(C)2008 FIDÉLITÉ FILMS-WILD BUNCH-TF1 FILMS PRODUCTION-JERICO
全国絶賛公開中

「種明かし」には賛否両論?しかし私は?

M・ナイト・シャマラン監督を筆頭として、「いかに観客を騙し続けるか?」を映画づくりのテーマにする監督は多い(?)が、本作は180度それとは正反対の路線。ドアのチャイムが鳴る直前、なぜリザは自分のコートに血がついていることに気付いてそれを水道の水で洗い流そうとしたの?

一瞬私はそんな疑問を持ったが、殺人容疑で逮捕されたリザの刑事事件は弁護士の努力にもかかわらず、かなり分が悪いらしい。それは第1に血。つまり、リザが自分のコートについていた血を洗い流そうとしたところで逮捕されたこと。第2に、ガイ者を殴り殺す凶器となった消火器にリザの指紋がついていたこと。第3に、リザが車に乗って現場を離れていくところを見た目撃者がいることだ。男女同権の国フランスらしく、長男オスカル

が生まれた後も、リザは出版社の編集長として連日活躍しているらしい。したがって、夫の世話だけをする「専業主婦」の目が全くないことは夫婦間の会話で明らかだが、そうかといって上司を殺してまで自分の地位をキープしようなんてリザが考えたの？

夫のジュリアンは心から妻リザの無罪＝冤罪を信じているが、裁判の行方は証拠上圧倒的に不利らしい。その結果下された判決は苛酷なものだったが、本作が面白いのは、ほんの1分間だけのシーンでリザが無実であり真犯人は別の女であることを観客に示すこと。シャラン監督流の、謎解きが好きな人はこんな「種明かし」には大いに不満だろうが、私はフレッド・カヴァイエ監督のそんな描き方に大賛成。だって、本作は犯人捜しに観客の興味を引きつける「〇〇サスペンス劇場」路線を狙ったものではなく、邦題どおりあくまで『すべて彼女のために』という人間の本质を描くことが目的なのだから。

思わず『板尾創路の脱獄王』を連想

ジュリアンの職業は平凡な国語教師。そんなジュリアンが、7回も脱獄した経験を持ち『脱獄人生』という本を書いたアンリ・パスケ（オリヴィエ・マルシャル）に面会を求め、「脱獄」の教を乞うたのは一体なぜ？パスケの許可を得てその話を録音したジュリアンは、よほどパスケの話にハマったようで、以降そのひと言、ひと言の意味をかみしめながら「作戦」を練っていったが、さてその作戦とは？

ジュリアンとパスケの会話を聞く中で、私が思わず対比したのが、09年11月19日に観た『板尾創路の脱獄王』（09年）。この映画では板尾創路扮する脱獄王鈴木はせっかく脱獄してもまたすぐに捕まっていたから、「それは一体なぜ？」という疑問が大きなテーマとなっていた。しかし本作でパスケがジュリアンに語るのは、「脱獄は難しいが、脱獄以上に難しいのが脱獄した後だ」ということ。

そりゃそうだろう。しかし、パスケがジュリアンに授ける脱獄の極意とは？そして、脱獄した後のあるべき身の処し方とは？

なるほど、ここに盲点がある

映画冒頭、外では出版社の編集長として辣腕を発揮し、内では愛する夫との間でセックスライフを含めて充実かつ良好な夫婦関係を保っているリザが、自らの腕に注射をしているシーンが登場する。こりゃ一体ナニ？何の説明もなければ、そのシーンで思わず、こりゃのりピーこと酒井法子と同じ？と感じる日本人がいるかもしれない。しかし、そこでタイミングよく「インスリン」という字幕が出るためひと安心……。しかし、リザはなぜインスリンの注射を？

インスリンの投与が必要なのは糖尿病患者だが、若くてスタイルがよく活動的なリザがホントに糖尿病？当然そんな疑問が湧いてくるが、リザに糖尿病の持病があることは、本作のストーリー構成上大きなポイントとなってくるから要注意！リザのインスリン投与が

最初に問題として浮上するのは、刑務所の中で次第に絶望感を強めていく中で、精神のバランスを失い自殺を図ったりザが、遂にはインスリン投与すら拒否するという状況になること。さて、ジュリアンはそんなリザをいかに説得して、インスリン投与による糖尿病治療を続けさせるの？

フレッド・カヴァイエ監督が自ら書いた脚本のすばらしさは、脱獄という大それた事業(?)を『板尾創路の脱獄王』のような発想とは全く異なるやり方で観客に見せること。これこそ、まさに『脱獄人生』を書いたパスケがジュリアンに授けた脱獄の極意だ。なるほど、ここに盲点が。

スリルとサスペンスに富んだクライマックスの脱獄のシークエンスをタップリ味わうとともに、それが「すべて彼女のために」であることをしっかりかみしめなければ

2009(平成21)年12月26日記

坂和式中国語勉強法は？

1) 西宮市在住の著名なバイリンガル作家毛丹青さんから、09年4月にNHKのラジオ講座の本をもらったことから、私の60歳の手習いとしての中国語の勉強が始まった。これは、北京電影学院での特別講義(08年10月)や、中国旅行記と中国映画の評論を収めた中国語による『取景中国』の出版(09年7月)など、私の中国での活動が広がってきたことの、必然的な結果だが、いざやり始めると、これが面白い。当初はテキストを読みながら、毎日15分間のラジオ講座を聴くだけだったが、それをiPodに録音し、新幹線の往復では、ヘッドホンで聴くのが習慣になった。また、半年後には初級編だけでは満足できず、中級編のテキストを購入して、聴き始めることに。それから1年を経た今、ラジオ講座の予習復習は当然だが、それ以外に電子辞書を引きその単語をノートに書き写して覚えるという、坂和式学習法

を確立した。

2) その効用の第1は、同じピンインの単語を比較対照しながら覚えられること。第2は単語の意味を中国語で説明する訓練ができることだ。「好きこそものの上手なれ」とはよく言ったもので、今の私は日曜日のファミレスでの中国語の勉強は2時間でも3時間でもOK。平日でも講座終了後の関連学習は1時間以上に及ぶことがある。自分の力が伸びてくるのを実感するのは嬉しいものだ。

3) 中国語はピンインが難しいから、中国人並みの綺麗な発音での会話は無理だが、簡単な文章をたどたどしく読みながら、その意味を理解するくらいなら今でもOK。また筆談を活用すれば、中国人との会話も少しはOKだ。次なる出版企画は、「坂和式勉強法」だが、そこではこんな中国語の勉強法も紹介しなければ。

2010年(平成22)年6月1日記